誰もが生きやすい社会をつくる
～訪問かいこと農福連携～

デザイン農学科　准教授 ● 川嶋　舟 Kawashima Schu

農業領域

課題点

1）農業従事者の高齢化

2）就農者の減少
……後継者不足

3）耕作放棄地の増加

作りたくても作れない

養蚕 ✖ 介護

訪問かいこ

蚕をつかった生きがいづくり
訪問介護の中に養蚕を取り入れる

福祉領域

課題点

1）働きたくても働けない
……生産年齢の半数以上が就労希望

2）賃金（工賃）が著しく低い

自立生活をする機会に程遠い

「生きにくさ」を抱えた方に動植物の持つ自己回復力を活用

動物や植物をそのまま対象にしてきた従来の農学に対し、私のテーマは、生活のなかで動植物をどのように活用するか、にある。「誰もが生きやすい社会をつくるにはどうしたらいいか」、動植物を介して考えているのである。

対象は、障がい者、高齢者、認知症やひきこもり、虐待被害者、登校拒否・出社拒否、あるいは触法行為者など、社会で生きることに困難な面のある「生きにくさ」を抱えた方々である。自分には関係ないと思われるかもしれないが、むしろ、いつ、直面するかわからない、誰もが歳を重ねれば必ず直面する問題だと考えていただきたい。

この研究に取り組むことになる最初のキーワードは「ホースセラピー」だった。杖なしでは歩行困難な方が、馬に乗ることで一定時間、杖なしでも歩けるようになる現実を幾度も経験している。さらに、動植物は人間の自己回復力を高める力を持つ。生きるため自信をつけ、社会で活躍されている方も少なくない。動植物は生きるきっかけづくりに大いに役立つ。

ホースセラピープログラム風景

人それぞれの「生きがい」「やりがい」「居場所」をいかにつくるかが重要になってくる。活躍できる場や、必要とされることが、生きるためには不可欠であるからだ。そこで次のキーワードとなってくるのが「農福連携」という考え方だ。

エノキ茸の紙巻作業をおこなう（農福連携）

できることを見つけ、できること仕事にする

農福連携とは、農業と福祉の領域がそれぞれ持つ課題について、お互いに補い合い解決していこうというものだ。

まず、福祉の視点からみると「急がなくていいこと」「自分のペースでできること」さらには可能なら「終わることのない作業」であることが望ましい。農業のなかには、雑草抜きなどあてはまる作業が多くあることに気付く。

一方、農業は、効率化しにくい多様な作業が組み合わさった仕事が多く、さまざまな能力を持つ人が常に求められている。福祉が関わる余地がある。これは農業のみならず、林業、水産業など他の第一次産業すべてに当てはまることでもあり、積極的に取り組んでいる。

生きにくさを抱えた方に動植物との触れ合いを通じ生きる自信をつけていただき、農福連携、すなわち農業と福祉のマッチングによって生きる場所づくりをすることが結果として、誰もが生きやすい社会を構築できることにつながる。

それでは農福連携を始めるにあたって具体的にどうすればいいかを考えてみる。

誰もが関われるようにするために、受け入れる側が相手をしっかり理解することが必要である。理解できることで、何をどうすればいいか、自ずと見えてくる。次に、本人のできる作業を抽出することである。できる作業をさらにできるようにする方が力を発揮しやすい。

これらの対応ができるコーディネーターやカウンセラーは、ほとんどいない。農業と福祉の知識をもつ人材を育てることもデザイン農学の使命だ。

訪問かいこは農福連携プログラムの一例

実際に取り組んでいる農福連携プログラムのひとつに「訪問かいこ」がある。蚕をつかった生きがいづくりと、訪問介護の組み合わせだ。

繭を整える作業

蚕を育て、それを生きがいにすると同時にQOLの向上につなげられる。付加価値の高い蚕を使うことで化粧品の原料などにする。販路は事前に確保し収入を確保する。すでに複数の地域で取り組まれ、高い効果を生んでいる。蚕の餌である桑も付加価値の高い種類を選別し、機能性食品や和紙などもあわせてつくり、冬場の仕事も確保することにとりくみはじめている。

訪問かいこの成果は、

訪問かいこの成果

1. 福祉領域での雇用創出
   → 健常者の雇用創出にもつながる
2. 農業従事者の確保
3. 里地里山の保全
4. 地域活性化

農学的知見を用い、福祉的な視点から生活スタイルをデザイン、モデル化したこのような試みが、誰もが生きやすい社会につながるであろう。